常山紀談

十一

和書門
類 四二三〇一
號
函 三九
架 二
冊 一七

49
内閣文庫
和書
類 四二三〇一
號
冊 一七
函 一七
架 八

内閣文庫
番號 和 42301
冊數 17 (1)
函號 170 49

漫筆雜考五

170-49

国立公文書館
National Archives of Japan

備前藩 湯浅先生編輯

常山紀談

書肆 千鍾房 宋榮堂 製本

常山紀談巻之十一目次

一 竹中重治心掛の事
一 岑澤某謙信を撃んとせし事
一 久世三四郎坂部三十郎物見の事
一 野々口彦助扣語の事
一 砂谷定清御供よ叅る事
一 坪内玄蕃心得の事
一 道化清十郎平野典兵衛よ對面せし事
一 谷太郎左衛門物前心得の事
一 可児才藏ゞ事
一 石田三成ゞ事

浅草文庫

一 関白秀次公生害の事 附 吉田修理ゞ事
一 木村常陸介寂後の事
一 秀吉有岡城へ使者ゟ行き〳〵事 附 河原林越後山脇源太夫ゞ事
一 成田助九郎誅せらるゝ事
一 秀吉公連歌の事
一 三木牛之介鍬形の詩哥ゝ事
一 谷大膳武勇討死の事
一 戸川肥後守秀吉公を負ふ事
一 黒田如水先見の事
一 秀康卿伏見ゟて妓女國ゞ舞を見給ひ〳〵事
一 直江兼續ゞ事

一 石田三成直江兼續密謀の事
一 兼續惺窩先生ゟ逢〳〵事
一 石田ゞ黨 東照宮を謀奉らんとせ〳〵事
一 細川忠與忠興の事

常山紀談卷之十一

備前國　湯淺新兵衛元禎輯録

○竹中重治曰分不過くる價を以て馬を購ふべからず其馬不乘る時能き敵と見るけ追詰て飛下んと思ふ欲或ハ又鎗を合せんと下り立時馬副の人れ續らざれバ此馬人のおふ物なるべし又かゝる馬ハ得がたくと思ふ心出く期を延ものゝ此能馬ゆゑふ所く名を失ふ事もあるべしかゝる士ハ金十両ゆく馬を購んとするふ五両あく永むべからざるものく飛乃り乘放ちく能き時ハ捨もの

屋さて五両の金ゆく又馬を求むべし馬よりかゝるべし此心得有べきなり身をも義ゆりく捨るべきまして財寶をや若し故も思ふなる心掛常ふるべきこゝて士の本意なるまこと歟

北條家の旗を預かり諏訪部と云ふ者度々功名あり何まこの時の軍ふや勝田八左衛門と云ふ者二人物見より出る敵不意ふ出くたけ来るふ二騎引取る時諏訪部ハ馬を領る故勝まつる馬より乗こなる故乗切く池帰る勝田ハ後まつる敵追詰くまバ下立く相戦ふ味方助来まバ勝田打伏らまし頭半切まつる敵引取こなる勝田助ゝ〆と思ふ勝田手ゆく頭を持上げいまく死せげくふ人々ハ奔て帰るやと聞く助けく帰アゝり勝田も度々の功名より後松平右衛門大夫ふ仕へゝり○竹中が論ず士こる者の知べ記処なり弓箭取身ハ朝夕ハ軍旅の事を論ぜん事あるまゝき事なりけるバ必天の冥加ふ尽べきなり戦國ふ生まれ人ハ其事ふ臨て功ゝく禄を得ゝふてこそあれ

今泰平の時ふ生まれ父祖の蔭ゆく禄を世々ハ天より士ハ職を命ぜられ其任を忘まつるハ天の冥加ふ盡ん事必定なり又天下ハ四民ハ上ふあるく下ふ鎮る職なるにせんハ口惜くべき事ふこそ

○謙信の許ふ岑澤何某と云ふ士罪有て放逐せらまつる越中の椎名ふ奉公ゝ謙信越中へ師を出さまつる時彼士叢よりかくれ鉄炮を持く伺ひ居ゝりゝが俄ふ鉄炮を傍ふ投捨て立居ゝ

ア謙信見出ゝていふ岑澤めゝゝいかれゝふはばるれ仁君智将を討奉らんと存ぜ事悔ゝく成てハ今遥ふ見ゆゝく先ふ屋形の心ふ背た又かゝる設けを工ゝや度此上もなき大罪ふてんとゝく首を刎らるべゝといひくらまし伏れバ

謙信打笑ひ吾は智仁とハ相應せざる虚名なり疾池帰りて
椎名ふよく仕へよいくまつぐらぐもかの士越後ゟ帰りて農夫と
朱く一生を終りてこそ

○東照宮何まの時北軍ゟや久世三四郎宣廣坂部三十郎廣勝
二人を物見ゟ出すゟ坂部ハ勇めるあり久世ハ氣色甚悪
うりてこそ側より笑ふ人のみこふ　東照宮坂部ハ天性
の剛けあり久世ゟ及ぶべきよあるべきさまてゞ久世ハ人り
劣て生甲斐なしと思ひ定めこる者と其故ゟ務てくぐむゆゑ
心を労して其こゝろ顕まてゝ今見ゟ久世ハ坂部よりも敵
近く進く行く見て帰らむあるとと仰々処ゟ二人帰りて来
ぶ来して御詞のめくちりて　東照宮坂部ハ生得ゝ勇を

頼ふふ〳〵嬰あり久世ハ勵むをとりて味ひ深〳〵慈ぜさせのひゝと
○明智光秀ゟ士野ゝ口彦助山中鹿之介ゟ多く功名せん事
を問席之介物まんゟハ必目の明ぬものゝ能ゝ得らまてよといふ
彦助さゝる事ともおもそび其後何まゝ戦ふや川際ゟ敵ゝ口
打出こる処ゟ朝霧ゟ立ちあびまて物色見え分ぜ時小山中ゞ教へ
しるを思ひ出しゟ綱をいうく爰ふく目ゞ見えぬといひしを
吾後まこゝたゝんと目をふさゞ心を鎮めく自をひゝなる
小川の半ゟ物具しゟる武者大差物を指く只一騎渡て来る
を見付く心もさハやうに目も明ふ成こゝまゞ押並べく引組で
おち首を取ゟ後ゟ彦助ゟも我真実の功名まなあゝじ
彼敵大ざゝ拙ゟ身の疲まく輙く我ゟ組敷まこるなゝん彼

敵も物前より目がねをさうつらんと語りき

○石谷十蔵定清ハ先祖ハ遠江石谷村の人なり大坂御出陣の時江戸より残させのひしふ御跡より従者一人より具足箱を脊負せ自ら鎗を荷ひく潜より江戸を出駿府まく追付奉ったるわ兼て心易こうしゝ御近習の人ふたより江戸ふ残ったる口惜く存重ね御法を破って参りぬ首を刎らるゝ事ハ素より覚悟ったるゝ事なれども残ばいとふ御処業らんとも落ぢうも悔むるハいかゞと申上てのかりひへといひしゝバ

将軍より殊より法制を厳ふ思召のふなるまゝ争ふ御宥あんより御あゝとうりつゞきて追々来るべくゝバ必列ゝ刎ふ行ったるんさまでも捨置べき事なゝゝバかゝと申さるよ

台徳院殿黙ゝとおりつゝたる十蔵ハ既より覚ぢる聞えたる上ハ今夜ら明朝ハ首を刎らるゝんと相待居ったるゝふ十蔵ゝのべて召まとゝり思ひ極めく進ぜ申ばゝて法を破ったるやゆゝ犯奴共切て棄だやと思へども若ね若なるまゝバ申ふよと仰出さるゝて黄金二枚賜ったるりさて江戸へハ重ね重ねて誰人おとゝなまゝ一人も忍びく御供より参ったるゝバ重罪ゝゝべゝと問く仰出さるゝてゝゝなりゝ

○石谷十蔵定清坪内玄蕃より向て度その功名世より言ゝあるまゝ心掛ゝ功名を遂べきさまあゝバ教へらるゝよといふ坪内聞く能ゝて問まゝれ人々事より臨て神の力を祈ゝ八幡ゝゝと いふ我も又頼ゝてハ相ゝよゝふなりて成就せゝゝとゝふあるまゝ

我ハ毎も八幡といふ神を刺通さんと一筋よりひて後まを取
ざうしといひそるまこそ

○道化清十郎ハ美濃の人なり信長に仕へて度々武功勝まる
るまゝに信長清十郎が指物に無双道化といふ四字を書て與へ
らるゝ時ハ世の人無双道化といへり平野與兵衛ハ齋藤家
の士なるゆゑ是も武功誉まさるゝ信長をを招るゝ時人々
往て手形を對面をゝ道化もあ速く物語せゝが道化いとく
侍ハかゝる先立引に殿るゝ聞其趣を委しく語て教へられ
よくいへば平野更に心無なゆもいハゞ齋藤家に冥加に叶ふ
士ハ皆々付死しつ吾生残アゝく重ての軍に必死とおひつまた
武勇の不足ゆゑに死を遁まき今日の向にあひ恥の上に恥にあひ

けゝと答へそまゝバ只今の答至極の理まてん先ゞ後殿ハ必死
を不志しゝてハ成ゞゝゝと大に誉て感じきゝと

○谷太郎右衛門ハ武功の士なり黒田家に客の會釈ゆく招き亟
まゝり谷が曰軍に場ゆく先敵より味方に氣を付べし
一人先に進出踏ゝゝゆゑ知ふ路より二人三人行重ゝバ始物ゝる
者を強とゝゝべし其処へ切べゝゝ吾ハ又別の所に独踏出
てこゝ居ゝべき志せよゝゝばゝくすゝまバ又其処へ味方つゞく
ぞゝゝ又日比心安き人のゝとぶ主君小寵愛せゝゝゝも軍場
ゆて其人のかゝそゝゝふ寄べゝゝに必獨立の心得まゝべし又士は
弓鉄炮に上手といゝゝゝ事好むるまあゝに敵を打立ゝき時
う或ハ城へ射込ゝき事のあゝんに足軽ハ進ゞゝに有に人を出

して命のがれん時射あてぎまぐれば面目なく危き場ハ敵も堅くなるべきなれば多くハ犬死する事なりといへり

○可児才藏吉長ハ尾州可児山の人なれども大剛の者なれ共篠を指物にして首をとりて篠の葉ふを口中に押込投棄て後の證とするなれ世の人篠北才藏といひ傳ふ関白秀次に仕へ長久を軍に秀次引退まるゝに岡本加介村善右衛門等臨とゞまりくしへ〳〵に才藏が来るを見くゝ山に倚かゝる心地をしてなりさて才藏殿ハ何方にぞと問ふ其退まてる方に行くり目前の敵を見捨てゝ退くハ聞くにも似ぬ才藏なるぞと論じるが或日聚樂にて語ふ知て才藏ふいるゝ所存をしやと問才藏笑て何心なく殿の仏を慕ひしるだりしき今人その論を聞

たりさるバ眼中にして宿へも帰らず直に立去るり後に福嶋正則招て七百五十石の禄を與へらる才藏が下人に久右衛門といふ剛の者あり才藏其禄の半分を與へ竹内久右衛門といふ才藏が墓藝州廣嶋に在り

○石田治部少輔三成ハ近江國石田村の百姓佐五右衛門といふ者の子にて幼いとけなきより的佐吉といひしが家貧しく近きあたりの寺にやりて或時秀吉彼まに行て佐吉が明敏なるを呼出して側に仕へしが頻に禄を増し水口四万石與へらるゝ後三成に人数を招きたんと問ふに鴻左近一人呼出しに秀吉ハ世に吟味する者と汝が許に小禄に ていとて奉公さるべきといへるバ三成禄の半分をなち二万

石典へと答ふ秀吉聞て君臣の禄相同といふ事むつまじ
ゆゑ傳へ聞いるゝゆゑ其志なるべしよも汝は仕へじ
〳〵も討ひらるれと深く感ぜゝ烏を呼出してまづ
羽織を與へ〳〵是より三成よ能く心を合せよといへゝ三
成佐和山を賜はる時島よ禄増無ふべきゝ〳〵いひまでも
禄更ふ不足ゆもいひ他の人そふ賜ふりへと辞〳〵ふ左
○近ぶ父ゆと室町将軍家ふ仕へ江州高宮の傍ふかひるゝきゆ
ゆて隠ゝ居〳〵ふを三成招き出〳〵ふ
○秀吉秀次を愛ひ〳〵関白を譲り夫より太閤〳〵ふ文禄二年
秀頼誕生あり秀次よ〳〵ぬ事ども多く有ゝまゝバ文禄
四年七月八日三成太閤の前よ出〳〵関白の謀叛既ふあ〳〵

〳〵て證を正〳〵書を見せゝまゝバ太閤怒て宮部善祥坊
堀尾吉晴オよ下知して疾伏見ふ来ら〳〵ふ一先高野よ退
き申ひ〳〵ねあるゝ二ッの中よと云送らまゝ〳〵ふば秀次畏て乗り
ゝて其後粟野木工頭秀用白江備後守成定熊谷大膳亮
直澄三人よ此事いゝ有べきと問ゝふ白江聞もあへず殿
下只今聚樂を出ゝ事然るべゝ此三人の中一人伏
見へ参り〳〵抱さぬ罪を申開くべしかゝるゝで討手来らバ防矢
射〳〵思召定めらまゝん外他あゝんやと申ふ熊谷此謀左さ
る事なまゝゝ帝都の騒ぎとなゝん事其恐るゝよあ
ゝまゝ〳〵謀叛人といまゝんも口惜るべし父子の礼儀なれバ
都を出〳〵東坂本よ趣き讒者を糺さまゝん事をヤ仕ゝ

法許されなくバ唐崎濱ゝ打出ゝ勝負を決するの外道なし
こゝで申さるゝ栗野只今危きを逼て宵を詰しも聞入らまで
迚も通まぬ所なるまゝ今夜伏見より押寄て屍を城ゝ出さ
ゞる婦人の縊まして死るゞ如くなるゝんハ口惜き事なりとて
されども秀次ゝれ用ざるして高野山に趣きさるゞ
一説ゝ吉田修理此時ゝるハ謀叛真実よおもゝまゝバ
人數一万我ゝ貸ゝまゝ今夜伏見より夜討して只一時ゝ城
を奪破ゝべしといひされども聞入ざるゝ修理後ゝ
越前秀康卿ゝ仕へ大坂侍ゝ忠直の供ゝて先陣さるゝ
五月吾天王寺口の御先手加賀利常ゝ命ぜられしゝば
忠直甚念らまゝ時本多伊豆守然らバ明日ゝ先ゝ

加賀の軍兵を踏越えおりゝ修理ゝ攻る軍せんかゝる事ハ吉田
修理よゝ決断さるゝ者ゝて修理ゝ出ゝ夜も短ゝ早支度して打立べし人々續ゝまゝと言捨く
已ゞ陣所ゝ帰るゝ否やひゝゝ物具して先ゞけして加賀の
軍兵の押ゞ所ゝ修理馬を乗寄せ今度の命ゝハ岡山表ゝ
加賀天王寺表ハ越前の三河守先陣を乗ゝ各ハゝゝぞる
やゝゝ出ゝ真一文字ゝ押破りかけ抜ゝまゝバ越前の軍
兵おゝつゞく修理ハ今日必死と思ひ定めゝまゝ本多忠朝
の陣ゝ鉄炮を打かゝるゝひゝく死やゝゝ聲々ゝ呼
とり真田ゞ陣を切崩して北る敵を追ゝけ天満川の深ゝ
馬を乗入ゝ溺死しゝる

青巖寺ゆゑ自害ありかの三人も所をゆて自害せり是三成
太閤の没後世をくるがへるべき考へ先関白を失ひると後
ゆゑ人申しける
関白秀次高野の青巖寺ゆゑ自害ありけるまこと事を司アて寵愛
せしまこと人々ゆゑ殊せられ自害しける中ゆ木村常陸介
師春検使の松田勝右衛門に向ひ今度関白聚樂を出ず伏見
に趣うせられんと定めしまこと時師春申ぬゆハ太閤御對面ず
ゆゑ人さんゆハ讒者のなど明らえ給りんさまてる夫さてま
あく中途より遠國へ放流せしまゆかひなく侍名を白双
に伏されん必此二ツの間あるべしあはまと太閤の使者を斬て捨
諸將の妻子聚樂にあるを人質に取罪なる事を申開くせゆ

ゆゑ人さもいかんに和睦も堅く定まり又戦ゆと勇名を逃
べし空しく聚樂を出させゆゑ格や有べきと再三諫めまられど
も吾太閤ゆ敵をる心なしして兼引ハざりゆ然まバ関白に於
て異心ありまゆ此旨を達して給りるバ其
恩黄泉の下ゆと忘るべるべと云ゑるを松田折を得く
秀吉ゆ申れバ太閤木村ゆ志を愍く妻子ゆ米百石を與へく
京都誓願寺の近所に住居せしまゆ
○秀吉信長の使者として荒木村重ゆ有岡の城に来る村重ゆ
士河原林越後守治々様めゆつらたまひ遂にハあまをなん
ゆゑ今刺殺ん事易かんと村重ゆさまゆゆゑまでも村重聞
入ぜ此事を秀吉に語ゑるまバ秀吉治々を呼出して懇ゆ詞

をかけさせ生る脇指を拔く引出物ゆゑ生るる村重指、
替のなくてといへど秀吉吾刀一ツを頼まて信長ゆ奉公する
者ゆ非ずといそれなり後秀吉世を平げて治冬を惡く悪く
ちゞ出して殺さまとるゆ治冬君の為ゆ其仇を除くハ武士
の常れ事なり秀吉奮き怨を忘まゞ無道なりといひく
死しなりと

秀吉河原林ゆ與へらまし脇指ハ三條吉廣ゞ作なり河原
林ゞ舊友山脇源大夫重信ゆ傳へなり山脇ハ摂州の人幼ゝ
なりより勇名のなるあり甲州ゆ往て内藤修理ゞ許ゆ仕
其後摂州ゆ帰て荒木摂津守村重ゆ仕へ頻ゆ用ひらまして長
臣なり村重神田伊賀守と軍の時神田ゞ軍奉行郡兵大夫

ハ勝まし剛の者なるを毛付して討取なり凡首数九十八
取て首供養三度せしなり荒木亡て重信中川清秀ゆ
仕ゆ隱ま居なり清秀の妻ハ重信ゞそゝぐ前田利家柴田
勝家丹羽長秀一万石をもく招らましなゞも引籠なるより
しを護國公池田信輝公懇ゆ招くせまひしハ来仕へ山崎合戦ゆ明
智ゞ士大将丹波國ゆく居なる城を預て居なる村上
源之丞と馬上ゆく鎗を合ま山脇ゞ鎗ハ十文字まて村上ゆ
馬の額ゆ疵付る疵ゆ馬ハ源之丞馬より落なるを従者加
け来て助るを源大夫詞をかけ村上と引組なる所を味方救多
ゆ合て村上ゞ首を得なり其後も功名有て士三十騎の将
なり

○秀吉北國に赴きし時丹羽長重の小松の城に立寄らるに長重の士成田助九郎といふ者あて秀吉先殿を北陸道の管領にせんと志津が嶽にて約束ありつるが加賀二郡越前若狭を賜はらぬ先殿過させたまひて後小松十二万石に減じ既に滅亡に近しともすべし秀吉の不義憎むに餘りあれば臣に討手仰付らるれば輙く刺殺すべしといひたてても長重聞入れずしてさて止ざるを秀吉いかにして洩聞ましけん大に怒りて成田を憎むこと甚しかりけれバ成田小松を退て伊勢の朝熊に隠れゐたりしを終に捜出して殺されける成田が子半左衛門長重に仕へて小松の軍に戦功あり

○秀吉或時紹巴に向ひ吾發句せん汝脇句せよとて

奥山にもみぢふみわけなく蛍とせられしに

しかとも見えぬ燈火のかげ　脇紹巴の句なり

紹巴蛍ハ鳴虫にはべらずと申す秀吉叱て蛍に聲なくとも吾鳴せんとせば鳴だしてや有べきといはれし時細川幽斎かたへより

武蔵野やしのをつかねてふる雨に蛍より外になく虫もなし

とよめる哥のありといはれしかバ秀吉悦ばれしとぞ

此歌ハ蛍の声ありといふ心にハあらず雨降る夜ハ皆虫の鳴止むものなれバ光の見ゆる蛍より外虫なしといふなり

○三木牛之介ハ畠山高政に仕へて剛の者なり五尺ばかりの鍬形打たる冑を着て運在天見敵無退文[illegible]を只はしかぬるを よかりけれ軍ある時も先がけをせバとかくあるにを鍬形に書させしが天文十一年正月河内の合戦に一番鎗を合せ敵の大将を

討取られ天文十六年七月廿三日三好政勝入道宗三と舎利寺の軍に討死しける後此哥の事を秀吉に物語する人ありけれバ秀吉歌の趣意よろしからず吾ならバ人ハ先へさし出して我ハ跡のかたをひかまし軍の時も先がけをしてとゞむべき者をといひまされけり

○天正六年秀吉播州三木の別所長治を撃つ時谷大膳ハ濱手の大將より兼て大膳ハ寄騎なりし秀吉望まれしかども信長許さゞりしを強て加勢せしめらる大膳敵三騎と馬上にて鎗を合せ皆討とりし秀吉猶かさの丸(出丸の名)へ攻らるべしとの命ハ大膳城堅固にして容易に攻取難しと答ふ秀吉日頃勇名ある紀大膳小城一ツ破りかねるやと詞をかけられけれバ大膳も怒て秀吉も既に刀の柄に手を懸べき色なりしかば竹中半兵衛立ふさがり戦場の勝負こそ力を尽すべきなれいかなる事ぞといふ処に蜂須賀彦右衛門も来りて秀吉の轡を取て押返し夜に入て秀吉酒肴を持せて大膳が陣屋に来りて今日の武功抜群なり先の問答ハ我過なりし後悔大方ならずとて懇情甚し其後大膳手勢を率てかけの丸へ攻かゝる城中もこれを大事と防ぎ矢石を打出せども大膳事ともせず進み士五十騎歩卒二百計一の城戸口を押破りすゝみしかバ手負死人数を知らず寄手押たゞけバ大膳念なく乗破りけるが数ケ所手を負て踞居ける所に法師武者猩々皮の羽織着たるが引返して大膳に向ふ大膳吾疲れたり近寄て首をとれ

高名はせんとて芝生を踏りて一太刀打つ大膳敵の草摺
を取て引寄せ脇指を抽て刺貫く処に別所が士大将由井
小兵衛と名乗て引返して池来て大膳を一太刀斬て
る処へ大膳が嫡子出羽守十七歳なるが走寄て生てみられて
由井を打て芝居に打倒て首を押へて父に向へば大膳も
息絶て出羽父の死骸を陣屋に入て取る首を秀吉
の実検に備ふ秀吉大膳が討死せし由を聞て せめて死骸に
なりとも對面せんとて陣屋に行給き人を付せらるるとて
涙ふむをぞ感ぜり

秀吉家譜に載せられ大に異なれ然れども此一条は
谷の家に傳へ来る説なる由なれば家譜は誤なるべし

大膳は江州犬上郡の人信長に仕へて川尻肥後守稲葉伊豫
守と同じく軍れ評定の人に加へられる十四才より四十七才まで
鎗を合する事九度首を取る十七度なり

○浮田秀家伏見に秀吉を饗せられる時廊下より行く処の
白砂の上に戸川花房を始として並び居て拜謁に秀吉
戸川達安に吾をおぼえたるやと問給へば戸川秀吉を見奉り
て書院に通りて秀吉かくるふるまひ多くなれば其より
して古た家の礼儀も多く失ひ給ふ

○秀吉病重かりしかば朝鮮渡海の軍兵を引取んと討ち
給ふる時朝鮮へは必徳川殿赴せらるべしと云ふ日本は自ら
徳川殿に帰服せんと人云ひし処に思の外に秀吉石田

三成に命ぜられて朝鮮に赴きくりさてハ日本の權威ハ
三成に帰せべしといひふらして黒田如水擬是を然ぜ
朝鮮の事三成にを業るふより日本ハ徳川殿の掌れ中に
あらと費も三成是より伐て人是を嫉そねん故ふ徳川
殿の仁徳に靡き従ひて日本ハ自然と徳川殿に帰服せん
といふまつが果して然りき

○越前の秀康卿伏見にく國といふ妓女を召て舞せしむ
時標にかけしる水晶の珠数見苦しくて物具の上にか
けふ珊瑚の珠数を賜ふるが故に舞る時頻に涙を
流しぬに人々怪しみ思れバ秀康卿今天下に幾千万の女あ
またも天下一の女と世に誉らるを名を記ハ此女なり吾天下

第一の男と世にいはるべあの女をさへ劣て果さるとなりへば
泣まくるとと仰有ける

○越後の士大将直江山城守兼續ハ朝日将軍義仲の乳子樋口
次郎兼光が末孫なり諫信に仕へ景勝に到る景勝奥州
にて百万石を賜ふ時米沢三十万石を直江に與へらるを倍臣
の中第一ハ大禄なり長高く容儀骨がく双なく辯舌明ら
に殊更大膽なる人なり且文藝ふも暗からず五臣注の文選
ハ此人板行させるとなすり詩をも作て

春雁似吾吾似雁洛陽城裏背花帰

などいふ句を世に聞
えなり伏見の城にく諸大名幾等も並居る中に伊達政
宗懐中より金錢取出して人々に見せるまつに其頃金錢

の始なり比よく珍しくてもてはやさる直江が末座に有し坐
をはるかに見てまじりとありし時直江扇の上に金銭を置て打返し
女童の持ものゝやうにして覗しけれバ政宗いや苦しからず手
にとりて見よと云も終らぬに直江謙信の時より先陣の下知して
采取しは手にかゝる賤しきわざなれバ汚れもやせんと扇に載てはとく
政宗のかたへ投戻しけり兼續父も山城守といふ身ながら僧なり
しが還俗して武勇を事としけり

○石田三成或雨夜の徒然に成しに直江を近付私語けるハ卑
賤より出て天下を治るハ大丈夫の志なり我豊臣家の恩深し
太閤斯世におはしまさん中ハ思ひ立べからずさりながら終にハ
旗を揚天下をとらばやと存るなり其時徳川家父子をバ如
何して討亡ぼすべき武畧を廻らしたまはんやと語りけるに直江其
を幸とやおもひけん是こそ志す所なれども徳川父子
関八州を領して且蒲生氏郷といふ勇将に親しみあり輙く勝
べからず先氏郷を滅し景勝に會津を賜はらんや然らば
吾景勝に謀ありて旗を揚我先陣して師を出すべし其時西
國の諸将をもかたらひ押寄て関東を討亡すべきなりと悪
むまじ相謀て終に氏郷を毒害し後秀行八十万石の地を
削て會津を景勝に秀吉賜ける此謀より事起るといへど
直江兼續悍窩藤斂夫に對面せんといへども窺入らざりしば兼
續わざとして行ざりけれバ不在なり度々招けども行ざるに今日来り
たまふと逢ば偽て他に出たるとや思ひけんとて直江が許に行き

ふ直江其日関東ゟ赴きしゝべ跡を追て大津ゟ至て對面
いたし直江慶きたる家を急ゟ取立る時人臣の心得ハいかゝと
問惺窩事を速ゟせんとをべ却て敗るゝ基なりとぞ答へける
後ゟ直江景勝ゟ進めゝ旗を揚させ必家を滅さべしと惺窩
いゝそれしゝゟ果して景勝ゟ事を起させたるゟ其功なゝざりき

○慶長三年八月十八日太閤逝去其比　台徳院殿伏見ゟおハし
きして太閤の病重りしゝば関東ゟ赴うせるゝん事延引な
りしゝゟ俄ゟ十九日伏見を發して関東ゟ帰らせるゟ是
東照宮遠大の神慮なるべし四老奉行内々相計て徳川殿伏
見ゟ有て権威日々ゟ増長なるべし秀頼公を早く大坂へ移し
諸方一同ゟ系集りゝく尊敬さるべき事然るべし　東照宮

強て申て同四年正月十日大坂ゟ移居ゝ　東照宮も送ら
せるゝゟゝく大坂へ御出あり片桐東市正且元ゟ宅ゟ御止宿あり
そるゟ十二日の夕ゟなるゟ俄ゟ打立るゟゝく淀川を御船ゟて上
らせるゟゝゟ枚方近く川岸ゟ人多く群集りゝ若や謀奉る
叛反の者ゟ有べしと疑ゝく処ゟ井伊直政ゟ足軽ゝゝ
中者あり程なく御船近く成ゝゝべ脇五右衛門などいゝる物ゝ
跪きて待ゝゝく頃て伏見ゟ入らせるゟゝ

又此時御乗物ゟハ村越与三右衛を乗させるゟゝ
東照宮ゟハ倍者九騎馬の中ゟ御供ゟて有ゝゝもゝ
又井伊直政ハ馬上ゟゝく御迎ゟ出物具して其上ゟ常の
衣服ゟゝり直政ゟゝ者皆下ゟ具足と弓鉄炮の者

彼是二千計りにて殊に御愛ありける跡八鹿毛を引来り
うちまはし其侭打ぬせのひく帰らせのふともつかへ
此頃既に世間さはがしく云ふ〳〵いろゐろ事ゝ出来らんと人〳〵
あやぶみおもへり　東照宮も御屋敷に大竹にて菱垣を結せ
らるゝ御門を押開き敵寄来らば堅固に防ぎたゝせのふべき
設あり御門を開く事然るべからざるとあらばまづ門を
閉て守らば敵に侮られたりとて只押たまて軍の支度をせよ
と仰有るゝで京極高次参りて大津の城へ引移らせらる
まんやと進めまされるを聞召敵寄ば上の臺へ押上げ金札の
宮の邊おゝく真先に出〳〵一合戦をゝべし吾兵二千計やあらん
敵何萬もあるとも打破る事かたからじと仰らまるる正月十九日

安國寺瓊長老生駒雅樂頭中村式部少輔堀尾帯刀四人
四老五奉行の使として
東照宮に参りて伊達政宗福嶋
正則蜂須賀至鎮緑組の事に付徳川家獨擅なる事ど
も豊臣家の爲ばかるべくもぎる由申旨あり依て世の中愈さ
わがしく風説あり其頃榊原式部大輔康政伏見に上るとて
二月廿五日尾州宮に居るゝ伏見の騒ぎゝ由を聞日夜道
を急ぎ〳〵そこそぐ〳〵にてきけば伏見にて既に　東照宮の
御館へ敵押寄せりなどいひふらす廿六日の晩膳所にて伏
見よりの飛脚に行逢いそぐ弓箭ハ始めやさぬといふと家
康政悦んで則膳所に陣し秀頼の下知と称し伏見の騒に付
東海東山両道の人留まるゝふまさせ勢田矢橋を三日押留

〻〻其比の騒しきよ諸國より聞傳へ京伏見よ集る人殊外
多かりしを押留らるゝ草津野洲を始として何万といふ數討る
べうべく扨康政三日の後未刻よ構へる関所をひらくせられば
旅人一同よ京伏見よ入る康政膳所を立く七千計の人を卒ゐ
く伏見へ入るべく京よりく関東より數万の軍兵池ゝ
いひふゝさと康政小具足着て鉢巻し馬ゝ押立て給られば
御前よ召て御くまづゝ御の〻をとゝまるを康政下知しく
御藏より料足數千貫出させ給ふ分波し内府の軍兵六萬
よりかけ給ふべ館ゝく兵粮の用意俄よ設けらるゝとい
ふ也ゝく店屋物を買来らしむ數千人京伏見淀よ馳回りく赤
飯菓子酒やゝの物一つも残らず買来るべ関東より十万の軍

兵集ゝ〻人を思ひぬ者もなし是よ依く石田が謀
しくなるいとり　東照宮柳生又右衛門ハ石田が士大将嶋左近
と同盟のよしふく懇なりと聞召て左近方へ行きく勢徐して
彼ハいろいろ聞て来まて仰有しは柳生左近よ逢て世
間の物ゝいふ成べき事なんといひべく左近笑て今松永
明智二人の智謀決断ある人なるべく何事ゝ為べきと打笑ひて
此子細ハ或時石田密謀よ及びるゝ左近豊臣家の為を存せん
斯あゝで止べきやされども爰よ存る旨あり大事を企るハ我志
ゝ慮を無二無三よ決断して不ハ猶豫有べうべきゝふ去年
より度々仕課まべき図をゝくゝの事多し既よ時を
失ひぬ能々世のありさまをとんるよ石田の家を悪む人々大ゝ

徳川殿よ心を寄より當家の存亡計るべくも一日のゆるも殘
多〳〵只理を非よりげ〳〵唯今まで疎遠の諸大將達へも色々
くどく〳〵遺恨なく射ひて交アと親〳〵みちびく時を待べきも一ツ
の計策まてこそといひもまバ三成さまバ緩々一時よ能志を遂
るゝも後の安らるべき樣を計るもまたといひくるよ左近いやく
事能く一時よ勝を得るもの〳〵バ後よ何の危き事ひべき内府よ
親〳〵き人々を積るよ其兵二万よるべく〳〵味方素より心を合
さるよ大國の人々又近國の兵を集るとも忽馳寄て五六万ハ
及ぶべ〳〵景勝卿再挙を取て下知し関東を攻破らんよ何程の事
ひべきとて又存る旨をいひ出るよ客の来て三成坐を立
ゝ八樫原彦右衛門居残アて左近よ向ひいふも仰さる事と

松永彈正明智光秀ハ無双の悪逆の者なるとて事を決斷する
よ誰ら相並ふべを此詮議の破り相るよ頼ひべきものをといひ
るゝとうや其よりくかく柳生よハ答へるとかく
○石田三成を始め相組さるる人々加賀利家を推そるて　東照
宮を傾けなんと日夜相謀まり利家の長子利長細川越中ら
忠興を招きて累年親〳〵なる間為らんさるる危ふらへを
扶〳〵やと問ふ二代の知音ひてらんバ聊兼畧ひのとを答へ
らる利長左斯こそ有べゝ頃日石田三成小西等相計つく内府
の向島ハ館を攻圍んと議決しぬ潛よ知らせんとて語らまらバ
忠興熟〳〵吟て日比の親〳〵く斯る大事を告知らせ事浅ら
らぬ事なり心得ひぬ明日参りく申合ひんとて帰られるる

是ハこれより前　東照宮ハ藤森よりおもむくるゝ井伊直
政が士木俣土佐もー風よりして御館の隣なる宅より火を
かけたるハ危き事なりと申ゞまとゞ　東照宮御寢所へ
土佐を召て具よ閑ゝ召まし其翌日向島へうつゝせのひろを
直より向島へ遣て　東照宮御對面有ゝ忠與近習の人を
屏けて只今遣る事別の子細もハべ石田等黨を結び利家を
依頼とゝて君を亡ゝやべきと企ん利長と年頃の親ゝ
よりゝ具よ洩義ぎぬ彼等が謀よ落ざる御設ことて為るべく
ゆへゝやさまゝるを聞ゝ召過るゝ年信長攝州出陣の比弱年
なて武勇の誉き有ー為申通ぜゝる斯る深志ゝんとを
知ざりゝる悔ゝよと悦だせのひゝく榊原康政を召ていゝく

有へきと仰有り事急なれ後まとて八人よ制せゝるべゝとヤ処ろ
忠與國の半すけハ人の與さゝるる寂一ゝんへバ浅野幸長を召まし
ゆへ彼ハ必徳川家よ心を寄べゝゆやさまゝるれバ頻て使を走らせ
らゝふ取あへず遣れらるを忠與出向ひく事の子細を語ら
るゝよ人多き中よかゝる事を知せゝる事　交のかひ有かゝ間ハ
疑の生ゝ易ち習ひよりとて忠與幸長先誓紙を書てなりぬ
若敵ぎせバ幸長ハ守治川を固めひるん忠與ハ敵の中よ折交
ゞ不意よ一軍仕ゝべゝとぞ相計らまるるさまゝゝ是も始終
勝を全うせべきそとてもあゝぐて利家と和平有よ踰る事ハば
只両人よ任させのひゝへゝく其翌日忠與風よ利長の許よ行向
ひて昨日の密謀一々内府よ告ゝるとぞ語らまるる利長色を

変じてこハそも戯よりや実よりやと驚きくゝ忠臣さゝもバ愚者も千慮の一得ハ此事を云ふ石田謀で両雄を闘ハしゝ其弊こゝ辛ゆんと料こりのよハ両雄相闘ひゝく亡びるバ安藝の輝元備前の秀家なゞを大将ゝして吾等ゞ如き者ハ多くハ攻平げるゆん所存見顕しハ寛仁の内府ゝ興ゝしてこゝて家をも起さゝ風くまゝ三成と心を合せて名を汚し身を失ゆんハ必定ゝてハかく申ゝ詞を許容ひるゝば少く内府と令親利家と和睦有て世穏ゝちゝん事こゝて然るべゝゆへ是全く前田家を佑るゝ所ゝくハと詞を盡ゝて規誨せゝまゝらバ利長も深く思慮して道理ゝ當まる事どもゝてハさゝバ父ゝゆさバやゝて利家ゝ斯と告て利害と詳ゝ語られくるゝ利家も諾せゝまゝくゝ

又一説ゝ五老五奉行の内争論不和の事あゝバ生駒雅楽頭親正中村式部少輔一氏堀尾帯刀吉晴三人和平を取計ふゞゝと兼く太閤の遺言ゝ因く井伊直政ゝ就て和平の事をたゝまゝらゝもいへり

常山紀談巻之十一終

国立公文書館
National Archives of Japan